



Data

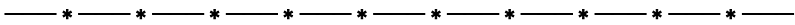
監督: マイク・ニューウェル
 原作: メアリー・アン・シェイファ
 ー/アニー・バロウズ『ガ
 ー
 ンジー島の読書会』
 出演: リリー・ジェームズ/ミキ
 ー・ハースマン/グレン・パ
 ウエル/ジェシカ・ブラウ
 ン・フィンドレイ/キャサリ
 ン・パーキンソン/マシュ
 ー・グード/トム・コートネ
 イ/ペネロープ・ウィルトン

👁️👁️ みどころ

近時、誰もがよく知っているチャーチルやダンケルクの戦いを描く大作が続いたが、ガーンジー島とは？また、ナチスドイツ占領下におけるガーンジー島の英国人の暮しとは？

それは、ロンドンに住む女流作家ジュリエットも知らなかったようだが、戦後島から送られてきた1通の手紙を契機に、「ガーンジー島の読書会の秘密」を取材してみると・・・？

人間の尊厳とはナニ？取材の中でそれを知ったヒロインが、ラストに見せる“幸せの選択”は潔くカッコいい。思わぬ“掘り出しもの”に出会えて、こりゃラッキー！



■□■ガーンジー島はどこに？こりゃ何の映画？原作は？■□■

本作の邦題は『ガーンジー島の読書会の秘密』だが、ガーンジー島って何？それはどこの国で、どこにあるの？また、そんな邦題の本作は一体何の映画？他方、本作の原題はバカ長い『THE GUERNSEY LITERARY AND POTATO PEEL PIE SOCIETY』というもの。これを直訳すれば「“ガーンジー島の文学とポテトピールパイの会”」だが、こりゃ一体ナニ？どういう意味？

本作のパンフレットにある駒沢女子大学教授・弥久保宏氏のコラム「不思議の国、ガーンジー島 ―歴史の荒波の中で―」には、ガーンジー島に対する詳しい解説があるのでこれは必読。それによると、イギリス海峡のフランス側コタンタン半島から約20km沖合いに浮かぶチャンネル諸島の1つで、ジャージー島について2番目に大きい島がガーンジー島

らしい。距離的にはるか北にあるイギリスより、すぐ南側にあるフランス（大陸）の方が圧倒的に近いから、ガーンジー島がナチスドイツの支配下にあった時代はさぞ大変だっただろう。それは、あたかも、アモイのすぐ南にある台湾の金門島が国共内戦が終了した後は大変だったのと同じだ。そのことは『軍中楽園』（『シネマ 42』 237 頁）を見ればよくわかるが、ナチスの占領下にあったガーンジー島の大変さは、メアリー・アン・シェイファー&アニー・バロウズの原作『ガーンジー島の読書会』を読めばよくわかるらしい。

■□■端緒は一通の手紙から。ガーンジー島の読書会とは？■□■

前述したように、本作の原題は前述したとおりだが、本作導入部に登場するガーンジー島の住民であるドーシー（ミキール・ハースマン）から、ロンドンに住む女流作家ジュリエット（リリー・ジェームズ）に送られてきた手紙によれば、ガーンジー島には、「読書とポテトピールパイの会」があったらしい。この手紙は彼女がかつて古書店に売ったチャールズ・ラムの随筆集を手にしたドーシーが、そこに書かれていたジュリエットの住所に送ったもので、そこには続いて、「ナチの占領から解放された島の本屋は復活しないままなので、ロンドンの書店の住所を教えてほしい」と書かれていた。「僕の所属する“読書とポテトピールパイの会”は、「ドイツ軍から豚肉を隠すために誕生しました」というくだりに好奇心をそそられたジュリエットは、彼の欲しい本を進呈する代わりに、読書会について教えてほしいと返事を出すことに。

『ニュー・シネマ・パラダイス』（89 年）では、イタリアのシチリア島を舞台に、少年トトと映像技師アルフレードとの映画を通じた素晴らしい友情が描かれていた。また、『軍中楽園』では、金門島を舞台に、「軍中楽園」＝「特約茶屋」＝「831部隊」におけるはかなくも美しい男女の恋物語が描かれていた。しかし、本作ではガーンジー島における何が描かれているの？そして、太平洋戦争中、日本軍兵士が次々と飢えて死んで行ってしまったため「餓島」と呼ばれたガダルカナル島ならぬ、イギリスの「ガーンジー島の読書会」とは？また、「その秘密」とは？

■□■島の食糧事情は？ポテトピールパイとは？■□■

『黄色い星の子供たち』（10 年）（『シネマ 27』 118 頁）や『サラの鍵』（10 年）（『シネマ 28』 52 頁）は、ナチスドイツ占領下のフランスにおけるユダヤ人の弾圧を描いた名作。また、『ブラックブック』（06 年）は、ナチス占領下のオランダでの、ユダヤ人女性とドイツ諜報員の将校との恋を軸に据えたメチャ面白い映画だった（『シネマ 14』 140 頁）。さらに、『ユダヤ人を救った動物園 アントニーナが愛した命』（17 年）は、ナチス占領下のポーランドの動物園を舞台とした『シンドラーのリスト』（93 年）や『杉原千恵 スギハラチウネ』（15 年）（『シネマ 36』 10 頁）のような感動モノだった（『シネマ 41』 231 頁）。

このように、ナチスドイツ占領下のフランスやオランダ、ポーランドにおけるさまざま

な問題点を描いた名作は多いが、ガンジー島のような小島は世界中の誰もその存在を知らないから、そこでのナチスドイツ占領下での過酷さも、知らない。しかし、ナチスドイツが連戦連勝していた圧制時代はもちろん、ナチスドイツの敗色が濃くなるに伴って食糧事情が悪くなっていたガンジー島では、島民たちの生活はホントに大変だったらしい。しかして、「ポテトピールパイ」とは要するに、ポテトの皮だけで作ったパイ。つまり、これはバターも砂糖も支給されない食糧事情の下で、少しでも美味しそうなのを食べようと郵便局長のエベン（トム・コートネイ）が工夫した料理の名前なのだ。

■□■なぜ読書会の名称がポテトピールパイに？■□■

本作冒頭、一頭だけ隠していた豚の肉をたらふく食べ、自家製のジンをたらふく飲んだ5人の島民たちが家路を急ぐ情景が描かれる。このメンバーが“読書とポテトピールパイの会”に結集した人達だ。とはいっても、この“読書とポテトピールパイの会”という名前は、運悪くその帰り道をドイツ兵に発見され、厳しい尋問を受ける中で、エリザベス（ジェシカ・ブラウン・フィンドレイ）がとっさに「読書会です」と口走ったところから生まれたものだ。これは、ナチスドイツが占領統治のモデルケースとして文化活動を推奨していたため、とっさにエリザベスが思いついた弁解だが、これによって、単に隠していた豚と自家製のジンを楽しんだだけの秘密の会を、その後は“読書とポテトピールパイの会”と称する「読書会」に格上げせざるをえないことに。

この読書会のメンバーはエリザベス、エベン（トム・コートネイ）、アメリア（ペネロプ・ウィルトン）、ドーシー、アイソラ（キャサリン・パーキンソン）の5人だ。当初はこんなカモフラージュのために発足した読書会だったが、その後5人は本を読んで仲間と感動を共にすることに夢中になっていくことに。

■□■ジュリエットは実在の作家？いや本作はフィクション！■□■

そんな仲間たちと占領下の厳しい時代をガンジー島で過ごしたドーシーが、戦争が終わった後の1946年に、ジュリエット宛に出したのが本作導入部の手紙だ。好奇心旺盛な彼女が、ポテトピールパイなる食べ物や、あの戦争中ずっと続いたという彼らの秘密の読書会に興味をそそられたのは当然。さらに、ドーシーから2度目に届いた手紙には、読書会の詳しい説明と共に「読書会は僕らの避難所でした」との一文があったから、ジュリエットは「皆さんにお会いしたい」と綴った手紙を、自らの著書を添えて送ることに。

他方、担当編集者で長年の友人であるシドニー・スターク（マシュー・グード）から、「タイムズ」に「読書」のテーマで原稿を書くよう求められたジュリエットは、そのテーマを「ガンジー島の読書会」と設定。それなら、何が何でもガンジー島に行き、直接取材しなければ……。それは作家として当然の行動だが、実はジュリエットは実在の作家ではなく、メアリー・アン・シェイファー、アニー・パロウズの原作における架空の人物だ。

近時、私は①『メアリーの絵で』(17年)、『シネマ 43』148頁)、②『あなたはまだ帰ってこない』(17年)、『シネマ 43』220頁)、③『コレット』(18年)、『シネマ 45』掲載予定)を観ることによって、それまで知らなかった①イギリスの女流作家メアリー・シェリー、②フランスの女流作家マルグリッド・デュラス、③フランスの女流作家シドニー＝ガブリエル・コレットについて勉強したが、架空の女流作家ジュリエットについては特にその必要がないため、無心にスクリーン上のストーリーを楽しむことに。

折りしも、ウェイマス港からの出発に際して、見送ってくれたアメリカ人の裕福な恋人マーク・レイノルズ(グレン・パウエル)から高価な指輪を添えたプロポーズを受けたジュリエットは幸せの絶頂だが、ガンジー島に渡って取材し、「タイムズ」へ提出した原稿が大ヒットすれば、さらに「両手に花」で公私ともに万々歳。そんな予感もあったが、他方で、いやいや、きっとストーリーはそうは展開しないだろう、との予測も……。

■□■キーパーソンはエリザベス！読書会の取材は如何に？■□■

ジュリエットに手紙を送ったドーシーは豚を飼育しているいかにも純朴な農民だが、妻がいないのに、何故か可愛い娘キットと一緒に暮していた。また、ジュリエットと共に読書会に参加し、ジュリエットの朗読と討論を合格だと誉めてくれた面々は、心からジュリエットの来島を喜んでくれたが、そこに読書会創設者のエリザベス・マッケンナ(ジェシカ・ブラウン・フィンドレイ)がいないことを不審に思ったジュリエットがそれを質問すると、なぜか全員が口を閉ざすことに。さらに、「読書会のことをタイムズに書きたい」と来島した目的を告げると、自宅を読書会の会場に提供していた女性アメリカ・モーグリー(ペネロープ・ウィルトン)は取材を断固拒否。翌日、エベン・ラムジーから島の歴史を聞き、ドーシーから島の案内をしてもらったジュリエットだが、2人ともエリザベスの話になると、固く口を閉ざしてしまうから、アレレ……。

しかし、「これは秘密だ」「話せない」と言われると、余計聞きたくなるのが人情。しかも、それがタイムズに書くネタの取材のため、わざわざガンジー島を訪れた作家のジュリエットとなると、なおさらだ。さあ、ジュリエットは読書会のメンバー全員から拒否される中、どうやって「ガンジー島の読書会の秘密」を取材していくの……？

■□■どちらの居心地がいいの？幸せの選択は？■□■

私は2002年6月に『SHOW-HEYシネマルーム 1』を出版した。この『シネマ本』の出版は2019年9月の今日までで既に43冊となり、近々『シネマ 44』と『シネマ 45』も完成する。しかし、所詮私の『シネマ本』は商業ベースにのるものではなく、ましてやベストセラーになることはあり得ないから、日々映画を鑑賞しその評論を書くのは、あくまで自分の趣味と勉強のため。そう割り切っている。

しかして、本作冒頭から後半にかけて、ガンジー島の読書会の秘密を取材する中で、

エリザベスの生きザマと死にザマに感銘を受けたジュリエットも、それを書かずにいられなかったらしい。それは作家として当然だろう。しかし、それを出版して公にするのは、島民との約束違反だから、その原稿は永久に陽の目を見ることはない。そう運命づけられたものだった。しかし・・・。

他方、ジュリエットはマークからもらった婚約指輪があまりに高価で場違いなため、それを指から外してガンジー島内での取材を続けていたが、ある日、サプライズ的に島を訪問してきたマークからそれを指摘されると、なぜか、もやもやとした気分。私が思うに、きっとそれは、自分の居場所がアメリカに豪邸を構えてくれると予告する婚約者マークとの裕福な生活ではないと自覚し始めたためだ。また、ジュリエットがそう感じ始めたのは、島で豚を飼いながら文学にいそしみ、エリザベスの一人娘キットを父親代わりに育てているドーシーの人間らしさに気づき、互いに意識し始めたためだ。

さあ、そうなるマークから指摘された、あの指輪の行方は？そして、ジュリエットの幸せの選択は？それはきっと、ジュリエットにとってどちらが居心地がいいのかによって決まるはずだ。しかして、本作ラストにみるジュリエットの決断、すなわち“幸せの選択”に拍手！

2019（令和元）年9月30日記